



〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026 URL http://www.utsunomiya-u.ac.jp
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



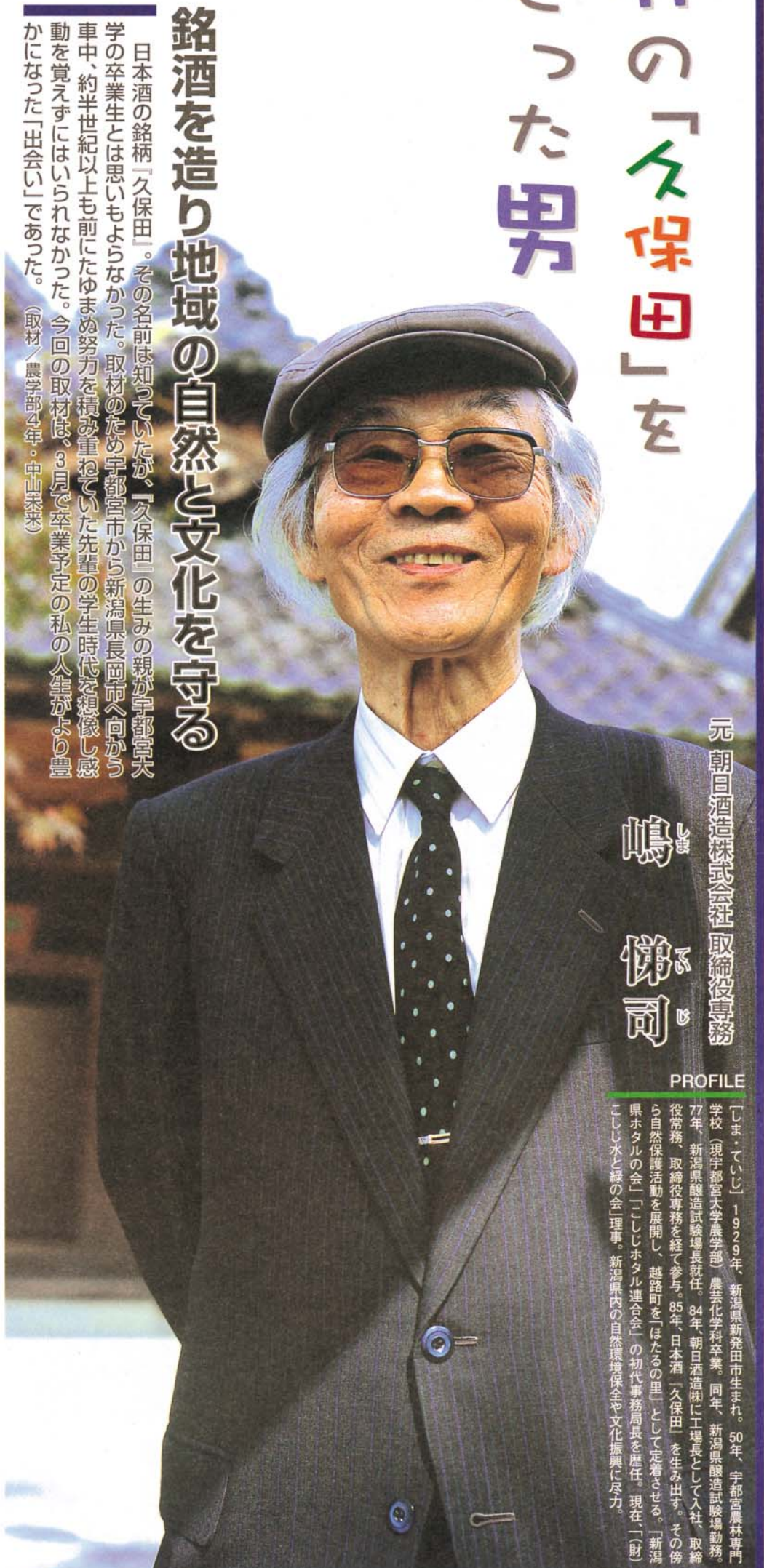
CONTENTS

- 1 世界の「久保田」をつくった男
- 2 座談会 語り合おう、宇大の魅力
- 4 地域貢献REPORT
- 5 SLOW FOOD
- 6 学生アンケート「宇大生は今!」
- 7 INFORMATION
- 8 研究 Keyword



世界の「久保田」を

つくった男



元朝日酒造株式会社取締役専務

鳴 佛 司

PROFILE

「しま・ていじ」1929年、新潟県新発田市生まれ。50年、宇都宮農林専門学校（現宇都宮大学農学部）農芸化学科卒業。同年、新潟県醸造試験場勤務。77年、新潟県醸造試験場長就任。84年朝日酒造株式工場長として入社。取締役専務、取締役専務を経て専務。85年、日本酒「久保田」を生み出す。その傍ら自然保護活動を展開し、越路町を「ほたるの里」として定着させる。「新潟県ホルタルの会」「しじまホルタル連合会」の初代専務局長を歴任。現在、「財」こしじまと緑の会 理事。新潟県内の自然環境保全や文化振興に尽力。

銘酒を造り地域の自然と文化を守る

日本酒の銘柄「久保田」。その名前は知っていたが、「久保田」の生みの親が宇都宮大学の卒業生とは思ってもよらなかった。取材のため宇都宮市から新潟県長岡市へ向かう車中、約半世紀以上も前にたゆまぬ努力を積み重ねてきた先輩の学生時代を想像し感動を覚えずにはいられなかった。今回の取材は、3月で卒業予定の私の人生がより豊かになった「出会い」であった。
（取材／農学部4年・中山未来）

■食べるものは何でも食べた

「空腹で焼けた町を初めて見て驚いた。宇都宮の町中が焼け野原でバラックばかりだった。宿屋はなくて、米5合を持参して民家に泊まりましたよ」。1947年、日本の敗戦後、新潟県新発田から宇都宮農林専門学校（現宇都宮大学農学部）の入学試験のため、煙を吐き出す汽車を乗り継いできた青年がいた。「いつも腹が減っていた時代。農家の字が分からず食えなかった。元朝日酒造株式会社取締役専務の嶋さん。やがて、故郷の新潟県で銘酒「久保田」を手がけ、「酒の神様」と称されてきた若き嶋さんの新たなスタートであった。「農家の庭先に行って芋を売っ

てもらったり、麦粉をもらったり。すいとんを作った。獣医畜産科の連中が授業で解剖をする日は肉が食べられるので喜んで待っていたね。馬とか豚とか、ホルマリン注射を打ったものも食べたよ。農芸化学科だったから濁酒を造って持って行った。農学の各料の連中が野菜や椎茸など自分たちで作ったものを持ち寄って、金属製の洗面器を鍋にして食ったよ」。

■銘酒「久保田」を造る

仕事がない1950年代。卒業式の日までにクラスの39人中15人くらいしか就職が決まらなかった。嶋さんは中学校の教師を経て、県の採用試験に合格し新潟県醸造試験場に入る。そこで酒造りを基礎から身につけ、約33年後、朝日酒造へ……。「当時の社長（現平澤会長）に

■大学は真の友を得るといふ

新潟県内の吟醸酒のうち5本に1本は朝日酒造の酒である。そして、朝日酒造の出荷量は、何と、栃木県産酒の出荷量とほぼ同じである。また約2%を海外に輸出している。フランスでも高級ワイン並みの良質な「久保田」が日本食ブームも手伝って好評を博しているという。さらに、嶋さんは良い酒を造る土壌としての地域の自然環境の保護に力を入れる。彼の子供時代のように蜜が飛び交うきれいな水を取り戻すため、地域に働きかけた。朝日酒造は財団を設立し、自然保護活動の支援と地域の文化活動の拠点となり、地域文化振興を支援している。「昔はこの町村にも蜜がいた。今よりもっと水田があったからね。きれいな水を取り戻して、県内では今ほどの地域にも蜜がいるよ。この活動も酒を買って頂いているからできるんです」。最後に私たちが後輩に温かい言葉をくださった。「自分の持っている領域を切り開き、何でも広がりを持つことです。何でも体当たりでやってくください。大学は「考え（価値観）を身につけるところ、真の友を得るところです」。